D—2　児童学実践者の養成に関する－考察Ⅱ－心理劇における役割体験の展開－

お茶の水女大家政　○土屋明美
東京家政学院大家政　鈴木百合子　吉川晴美

目的　「心理劇においては日常生活の出来事をきっかけとし、いま・ここで・新しく場面化し問題解決の可能性を発見する。『もし～ならば…こうする』の決定を意識化し生活に役立てることの可能な諸技法が展開する」㊟　この観点から、主として演者、観客、補助自我的役割体験役割技法について考察し児童学研究における心理劇の有効性を明らかにする。

方法　行為法－心理劇（考察Ⅰに同じ）

結果と考察　活動の特色①指導者間における心理劇的役割分化②役割を段階的に体験する③漸的、小集団活動（臨床実践活動へむけての準備反省的活動，学論研究）である。

〈演者体験〉役割取得へのとまどい⇒役割演技において安定⇒関係媒介的役割創技において生き生きふるまう。	〈感想〉子供になりきるのは困難⇒多様な関わり方の可能性を発見⇒自分の役割を意識しながら新しくふるまう。	演者技法　場面状況に内在的に役演し結果において課題を接在化する－生活場面投影技法，図と地の転換技法，関係通路敷設技法，役割の集団化技法　補助自我技法　集団(人)と課題(物)の相即的発展に必要な潜在的自己(役割)を顕在化・創出し描画する，演者性を促進する－バック・アップの技法　空間操作(反響・増幅・拡大)の技法，物理的公配位置関係の技法
〈観客体験〉場面展開を外から捉える⇒心理劇場面内構成要成に気づく⇒場面の変化発展経過における緩・力動性に気づく。	〈感想〉遊びの展開経過を明確に捉える⇒母のことばかけは重要である。⇒活動の移り変わりの重要性に着目できてよかった。	

㊟松村康平，講義録，他参考文献「関係学研究」6巻　関係学研究編集委員会，「Acting-In，サイコドラマ的諸方法の実践的諸活用」松村監訳．1978．